

昭和51年4月1日発行

(通巻第53号)

ヒマラヤ

HIMALAYA

1976年4月号



日本ヒマラヤ山岳協会——HAAJ

HIMALAYAN ALPINE ASSOCIATION OF JAPAN

第6回東日本ヒマラヤ研究会

6月26日～27日 宇都宮で開催

これまで東北地区持回りで開催してきた研究会でしたが、始めて関東に会場を持つことになりました。HAAJの最大の研究会として充実した内容はすべて報告書にまとめられ、高く評価されております。今回は“インド・ヒマラヤ会議”的性格をもって集中的に研究されることになっています。地理的にも便利な所ですので、会員諸兄弟多数の参加を希望しております。懇親山行等楽しい催しも企画されており、事務局では早くも準備に入っております。

要 項

〈趣 旨〉

過去5回にわたり開催されてきた本研究会は、今さらくり返すまでもなく、地域に大きな貢献をしてきたことは、国内外における参加者の実績によって証明されております。特に第4回研以後主要なテーマとして取りあげてきたインド・ヒマラヤに関する研究は、HAAJの目ざす方向とも合致して、75年度には関係3隊の遠征が実施され、貴重な収穫を持ち帰っています。

インナー・ラインの改定によりインド・ヒマラヤは、新鮮なプレイ・グラウンドとして素晴らしい魅力をもって、ヒマラヤを愛する者へ開かれるに至っています。また、政治的配慮から厳しい制限の設けられている地域には、我々の憧れてやまぬ未踏の高峰と未知の文化が存在しております。

このような時にあたり、本年の研究会は従来の地域研究を更に進めて“インド・ヒマラヤ会議”的性格を強調し、実践の裏打ちによる深みあるものになりたいと考えます。

初めて東北を離れ、関東の地に会場を持つことになりましたが、これを機に“東日本”の輪が一層拡大されることを願います。

HAAJ会員の内外を問わず、ヒマラヤに関心を有する多くの参加を希望します。

〈主 催〉 日本ヒマラヤ山岳協会 (HAAJ)
〈後 援〉 (下野新聞社)(栃木県山岳連盟)
インド大使館
〈期 日〉 1976年6月26日(土)～27日(日)
〈場 所〉 宇都宮市「くろかみ荘」公立学校

共済組合施設、宇都宮市桜

〈参加者〉

- (1) ヒマラヤに関心を有する者。
- (2) 講師、パネル・メンバー。

〈参加申込〉

別紙申込書に記入の上、申込金3,000円を添えて下記へ申込んで下さい。現金書留で送金のこと。申込みなく当日の参加はお断りします。

※申込先

〒321-32 宇都宮市

館野秀夫

〈申込期限〉

1976年5月25日(期日厳守)。申込後不参加の場合は6月10日までに連絡して下さい。不参加となっても申込金はお返し致しません。(報告書の送付をもって代えさせていただきます)

〈参加費〉 9,000円(但し、報告書代を含む一切の経費)当日、申込金との差額を納入すること。

〈その他〉

- (1) 参加人員は80名で締切りますので早目に申込みのこと。
- (2) 当日、各種資料を特別価格で頒布します。
- (3) スライド上映を希望する方は予めお知らせ下さい。

(4) 76年以後に計画をお持ちの方は計画書を持参して下さい。(90部)

(5) 講師、パネラーについては確定後、ニュースとして参加申込をされた方に配布します。

<日程>

※6月25日(金)…前夜 18:00~
有志懇談会(情報交換, 懇親)

第1日 6月26日(土)

8:00~9:00 受付

9:30~10:00 開会。オリエンテーション

10:00~11:00 最近のインド・ヒマラヤにおける外国隊の活動

11:00~12:00 <地域研究>

東部ヒマラヤ地域への誘い

HAAJ東部ヒマラヤ研究会

12:00~13:00 昼食。事務連絡

13:00~14:30 <記念講演>

聖山への道

長谷川伝次郎氏(交渉中)

14:30~14:45 休憩

14:45~19:00 75年インド・ヒマラヤ登山隊報告

(6隊, スライド及映画。1隊40分)

19:30~21:00 デイナーパーティ

21:00~ 情報交換会

カシミール, ラダック, ガルワール, 東部ヒマラヤ, インド一般

第2日 6月27日(日)

8:15 事務連絡

8:30~12:30 総合パネル討議

インド・ヒマラヤ登山をめぐって

(パネラーはインド・ヒマラヤ遠征経験者及学識者により構成)

12:30~13:00 記念撮影。閉会

※13:00~16:00 専門集会

(1) HAAJ 専門研究会(東部ヒマラヤ研, ラダック研, ワハン研, EXP 研, 他)

(2) HAAJ グランドファミリーツアー打合せ

(3) 他

※懇親山行 6月27日 16:00~6月28日 15:00

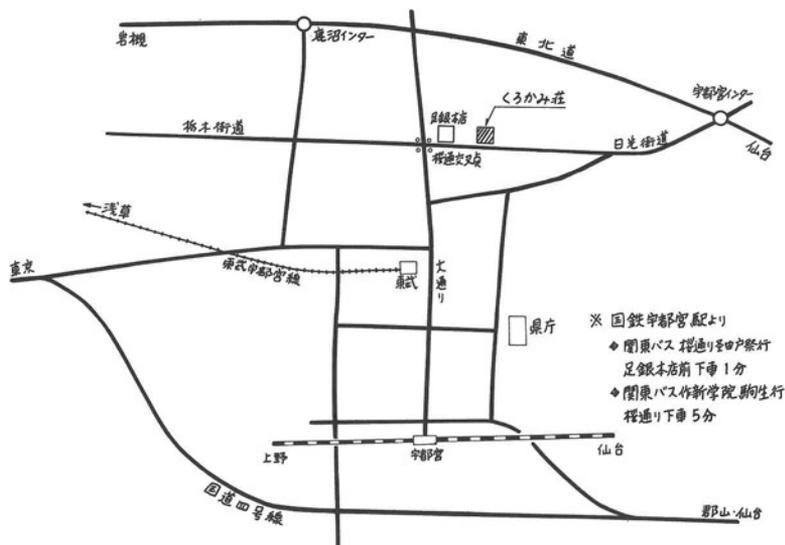
「知られざる日光を訪ねる会」

一日光の余り知られていない文化財, 遺跡, 自然を探勝し, また参加者相互の親睦を図るために行なう

会費4,000円(宿泊費のみ)自由参加

知られざるインドの16%映画

「ガルワール山麓の旅」「世界の屋根を行く」の2本のカラー16%映画を会期中に上映します。各40分のもので、事情があってこれまで公開していなかったものですが、特に、今回のインド研究会のために上映します。ご期待下さい。



初登頂の二峰に命名

HAAJ・ガルワール・ヒマラヤ遠征隊

75年にHAAJが派遣したガルワール・ヒマラヤ遠征隊は、P. 6992, Ca 7000 (P. 6911), Bamchu (6303m)の三座に人類初の登頂を果たした。バムチューを除いてはいづれも無名峰であることから、ゴッドファーザーの栄誉は初登頂者の特権と感謝し以下のように命名した。

P. 6992⇨Rishi Pahar (リシ・パハール)

リシは“賢者”，パハールは“峰”で、いづれもヒンディ語である。つまり“賢者の峰”となる。リシ・ガンガとはヤングハズバンドによれば「……ヒンズー教の神話では、そこを“7人のリシ（7人の賢者）の最後の地上の宿りとしている……」とある。“リシ・ガンガ最奥の高み”ということで命名した。

(奇しくもHAAJ隊は7人であった)

Ca 7000 (P. 6911) ⇨Saf Mina(サーフ・ミナール)

サーフ=白い，ミナール=ピラミッドでヒンディ語意である。Ca7000と称していたGA隊の事前研究で見つけられたピークは，SS

AF1:15万図やその他の我々の目にふれる地図には無かった。しかし，これだけの大きな山が測量ポイントにないということは考えられなかったので，リエゾン・オフィサーを通して軍の地図を当ててもらった。厳秘地図には正しく，P. 6911の名で存在していた。(予想した標高より若干低かったのが残念だったが)，大プラトーの上にこの山は白い三角を幻想的に蒼空に突きたてていた。“白いピラミッド”という印象が鮮明に残っている。

これらの命名はIMFへの申し出，及びH・Jなどにより公認されることになろう。HAAJが命名した山がヒマラヤに存在するとは楽しいことである。(稲田)

インド・ヒマラヤ概説

— 沖 允 人 —

インドの北辺はネパールの南側の国境を除いてはそのほとんどいい地域が山岳地帯である。東はビルマとの国境からアッサム，シッキム，西はネパールとの国境からガルワール，ラダック，カラコルムの東端へと続いている。“鉄をも溶かす”と形容されるインドの暑い暑い夏でさえも，これらインドの北部山岳地帯には万年雪をいだく峰々が連なり，その対称のはげしさは，昔からインドの人たちに，ヒマラヤには神が住んでいると思わせるのに十分な舞台装置を提供してきたといえよう。ヒマラヤを聖地とあがめ，そこにはヒマラヤ

の神々が住んでいるという信仰は現在でも続いており，夏にはそれらヒマラヤの聖地へむかう信者が列をなすほどである。

しかし，インドヒマラヤは土俗のインド人や，そこを訪れたり，住みついたりした近隣諸国の人たちによって開発され，はぐくまれてきたという長い歴史とそれに加えて，地形的，気候的，国際的なバラエティのゆえに，一様に論ずる訳にゆかないのである。それでこそインドの多様性という興味つきない話題を提供してくれることになるのである。

東部ヒマラヤ

ビルマの北辺、アッサムの山岳地帯あたりを仮に東部ヒマラヤと呼ぶことにする。ここはモンスーンの影響を強く受けるという点が共通した特長となっている。そして、政治的理由で入域が困難という点でもよく似ている。一般の人が特別許可なく入域できるのは、ごく限られたところである。ビルマはマンダレー、パガン、タウンジーという中部ビルマあたりまでで、山岳地帯の玄関ともいえるミッチナへは定期便が飛んでいるというのに外国人は簡単には訪れることができない。ビルマ側からインドへ接近するのは山岳道路が建設されているにもかかわらず現在では不可能である。同様に中国側からのアッサムなどへの入域もまず望みはない。

インド側からのアッサムはジョルハット、シーロン、マナスなどが容易に入れるところである。しかし、ここへ行くのにもビザの他に入域許可が必要である。アルナチャル(旧 NEFA)に近い、ディブルガールやリラバリなどもビルマと同様、飛行機の定期便がカルカッタから飛んでいるにもかかわらず外国人は訪れることができない。ブラマプトラ川のむこうにそびえるアルナチャルの山々はまさに秘境中の秘境といえよう。

ブータン、シッキム

ブータンは1974年から短期間の観光客を受け入れることに決め、日本からもかなりの人がこのヒマラヤの桃源境を訪れている。しかし、ブータン観光局に支払う滞在費が、非常に高く、そのためにブータン観光ツアーの値段は約70万円もしていて、ちょっと大衆の手がとどかない“高嶺の花”となっている。山岳地帯への入域はパロやティンプーの近くの峠しか許されていない。

シッキムは1975年から王制を廃止しインドの一つの州になったが、入域は以前にも増して困難になっている。特別許可がとれたとしてもガントックのみで3日間という厳しいものである。世界一美しいといわれるシニオルチュウや8000mのジャイアンツのそびえるシッキムヒマラヤへ遠征隊が入れるのはまだまだ遠い将来のことのようである。

ただ、ヒマラヤの展望台として有名なダーズリンを起点としてカンチェンジュンガの見える2～

3のトレッキング・コースは比較的容易に許可がとれる。

ガルワール・ヒマラヤ

ネパールの国境からガルワールが始まり、ナンダデビーを盟主として、数多くの7000m級のピークがある。ここは1974年にその一部を外国人にオープンし、HAAJのP. 6992mをはじめとし、カランカ、デビスタンIなど日本隊も早速に入山し、成果をあげている。

ヒマチャルの山

マナリ周辺は以前から外国人が許可なしで登山できる山が多く、従ってかなりのパーティが登山をおこなっている。マナリという日本でいえば上高地のような森と山に囲まれ、清流の流れている美しい街を基地としての山登りやトレッキングなどは日本人好みのものであろう。シーズン中は定期バスが、約4000mのロータン峠を越えて、ヒマチャルの山麓、ケイロンやウダイプールなどに運行していて足の便もよい。

インドラサン、ディオチバ、ハヌマンティバなどよく知られた山々、パブラン、デビスタンなどさらに奥地の山々、そして、パラシグリー氷河や、ラダック地方の南部の知られざる地域と興味はつきない。

カシミール・ヒマラヤ

森と湖で知られたカシミールは“東洋のスイス”というにふさわしい風光明媚な山岳地帯である。スリナガールを起点として、4～5日でB.Cに入れるコラホイやハラムクの5000m級の山々が短期間の登山には丁度よい山々である。小さいながらも氷河があり、岩壁も立派で、ヨーロッパアルプスを思わせる山が多い。

スリナガールからバスで2日ほど北東へ走ると小チベットと呼ばれるラダックがある。シルクロードの昔そのままの生活をしているラダック人、月の世界を思わせる荒々しくそして何故かロマンを感じさせる風景など異郷というにふさわしいところである。

ラダックはその南西部が外国人にオープンされているだけであるが、そこにはラダックよりもはるかに秘境といえるザスカールがあって探検好き

な人の垂涎の的である。

中国とインドそれにソ連が平和的に国境問題を解決したら、このカシミール北辺の山々は外国人の訪れてもよいところとなり、カラコルムの東部を形成するサセルカルリ山群なども含め、登山家や旅行家へのすばらしい贈物になろう。このことはカシミールだけでなく、前述のアッサム周辺も含め、インドヒマラヤ全体についていえることである。

逆に考えれば、現在のインド北辺は、隣国との政治的な争いの中心になっており、それだけに、この地域を訪れる人はこのことを頭に入れて行動しないと不要のトラブルを起すことになる。

以上簡単にインドヒマラヤを概説したが、詳しくは下記の文献（HAAJ在庫のもののみ）を参照されたい。

①ヒマラヤの桃源境、ブータン・シッキム・アッサム（2200円）

この地域を旅する人には必読の本であろう。カンチェンジュンガの見えるトレッキング・コースも紹介している。

②インド・ヒマラヤ・トレッキング（100円）

クル・マナリ地方を中心に解説したハンディなガイドブック。カシミールも含まれている。

③ヒマラヤを歩きそして登るために（2400円）

高所登山のタクティクスなど研究的なものが多いが、それに加えてインドヒマラヤ登山の手続、ガルワル地方の概説などがあり有用である。

④パンジャブ・ヒマラヤ（300円）（残部少）

ディオチバなどを登った南部山岳会の写真を中心とした報告書。

⑤パンジャブヒマラヤ登山隊報告書（650円）

滋賀岳連隊のパプラン峰他の登山報告書。

⑥カシミールの街と山（600円）

カシミールのガイドブックで山岳地の紹介も含めてあり、楽しい読物でもある。

⑦秘境小チベット・ラダック（2400円）

レーを中心としたラダック紀行、ラダックの民俗、歴史など貴重な記録。地図3葉も貴重。

⑧カシミールからラダックへ（900円）

タジェワス山群の試登、ラダック紀行の他に、インドのインナーラインの解説があり有用である。

インドを旅して

保坂昭憲

今世界的なインドブームです。若者がなぜ目指すのか、ここを旅して私流に書流してみたい。

太古の時代より時が止ってしまった国インド、「生きる事」の原点からすべてが始まる国インド、我々日本人が常識なしには何ごととも考えられないこの日本から海を渡って14時間、すべての常識が日本人の常識になってしまうこの国を旅する時、自分に対して謙虚に旅をする心があるか否かで一日も早く脱出したいと思う人と、ゆっくり旅を楽しみたいと思う人に二分される。この国で特にこれを感じる。

一つの街に「サラマライクン」のモスク（回教）と「ナマステー」のテンプル（ヒンズー、仏教、シーク、ジャイナ）それにキリスト教会が共存しているインドを旅する時、宗教とは？ という疑問にぶつからずに旅する事はむずかしい。日本で京都、奈良を旅するのと異り、上づつた修学旅行的心はない。自分と神が対峙出来るような気が

本当にするのだから不思議である。又、ブタガヤへ行く人は昨日の自分と異なる自分を求めるに違いない……………さとりて。

ラダークでブデストテンプルへ行き、ラダークネーム「サンゲス様（シャカ）」と対面すると旅人の感傷か涙が出るほどありがたいと思う。これは単に偶像崇拜ではなく、ラダーク人の心にふれ（仏教的心）自分も同じ心をもっているんだなあと思うと仏教の偉大さに心をうたれる。異国に来て寺へ入る「茶をどうぞ」、飯を食べている所へ行く、自分達が食べているものと同じものを勧められる。それは必ずしも自分の嗜好に合うものではないがしかしそれにもましてそれを出してくれる心がうれしい、来て良かったと思う。

荒涼とした砂漠を見て、平穏な生活で神仏を云云するのはむずかしい。しかし、きびしい自然条件の中で生きて行く人達には必要でありこれなしには生きられないと思う。インドへ来て一日一日

新しい出来事につづかる。腹も立つ、しかし毎日がこの人達に世話になりながらの旅なのだと思うと寛容になれる。

チベットについて

スリナガール、レー、でよく行商人のチベタンと会う、私をネパーリーと思い日本人だというとうそだといい人達、旅券を見せて始めて納得する。彼らチベタンの顔には日本人に見られない大陸的な包容力が感じられる。深いしわの中にきざまれたチベット民族の運命、ラサから来た人たちは何を考えているのだろうか、ポストベトナム、印・パ・露・中・米の思わくの中でチベットの人の平和はあるのだろうか。自分達の手ではらいよけられない力がかかろうとしています。彼らが生れた故郷を捨て南下している現実を見て、日本民族のふるさとがここにあると思うと一日も早く自由に往来出来る日の来るのを祈らずにはいられない。

インドに住む日本人について

ある日、日本人学校の先生といっしょになり一宿一飯の恩義にあずかった。彼の名を峰さんといひ、ニューデリー日本人60世帯の子弟25人の日本人学校の先生で、6人の仲間と外務省から派遣されている先生であった。仕事でインドに来ている人達と我々旅行者の違いに驚かされた。彼らは自然動物園の中の人間同様一定の軌道しか行動が許されない日本の常識の外で行動しているようであった。私のように見知らぬ街へおいで無計画的に旅する事にびっくりしていた。彼らの仲間内ではインドにおける最悪の状態が語り継がれているかのように汽車はあぶない、バスはひどいなどと忠告されるとの事。

「まだ半年だというのに旅をするんですか？」それは危険だからよした方がいいと言われるそう。我々旅行者が利用するツーリストオフィス、ダークバンガローなどの国の管理下にある施設すら知らないようであった。旅行業者による格付されたホテルへの旅より出来なく、それ以外の旅は考えられないとの事。

インドの結婚、カースト、宗教と色々な話を話して別かれる。

仕事のためのインドの旅を考える時私も今のよ

うな気持ちで旅が出来るだろうか？……疑問である。

バスの中での失敗

カルカッタでバスで街へ出る事にする。ものすごいこみようである。ある者はタラップにぶらさがりすこぶる危険である。何とか乗り込み中に入る。必要部分以外木製におどろく。古いため雨になるとふやけた窓は不快を感じる。そんな時席があいたのでサッとすわった。なんとなく視線を感じる。しかしいつもの視線と思い無視する。隣に中年女性がすわり、その女性の尻がだんだん私の方へよって来る。インドとしてはめずらしい凶々しい女だと思って不思議だなあと回りを見わたすとみんな女性ばかり、しまったと思った時はもう遅い、みんなが私を見ている、てれ笑しながら「ソーリー」と席の上を見やると〔女性専用〕という事、納得。インドではバスがすべて分かれているわけではないが注意が必要、又汽車でも箱によっては女性専用車両があるので注意が必要。Boxごとに通路がないため次の駅まで肩身の狭い思いをする事になる。日本のようにホームで弁当を買い飛び乗りはさけた方がいい。

(ベナレスからガヤの間での体験より)

最後にインドを旅してインドの神秘性と深さを痛切に感じる。又それに対し皆無に等しいくらい無知な自分に気がつく。もしインド学というものがあるとしそれのおもしろさ深さを知る時、欧米の文化などを研究していた若者の心をゆさぶるに違いない。最近それに目をむけられて来たと思うとうれしいインドブームもうなずける。

東洋の心でインド研究をしてもらいたいと思う。

(ヌンクン隊々員)

—— ヒマラヤ便り —— カトマンズにて——

2月11日 松本香代子

51年1月31日、羽田を発ってインドをまわり、カトマンズに2月9日につきました。デリーではフィダさんの友人のワリアさんにめんどうをみてもらい本当に助かりました。

明日、12日からボカラにむかい、ゴラパニ、チヨムロン方面をトレッキングします。カトマンズのランジャンさん一家もお元気です。HAAJの皆さんによろしくとのことでした。3月末日頃には帰国する予定です。

ネパール政府 登山規則を一部改定

このほど登山規則が一部改正公布された。従来の規則と異なる点は次のとおりである。

A・登山料

- 1 エベレスト 15,000ルピー
- 2 エベレストを除く8000m峰 14,000ルピー
- 3 7501m～8000m未満峰 12,000ルピー
- 4 6600m～7500m峰 10,000ルピー

B・保険金及び日当

- 1 リエゾン・オフィサー 200,000ルピー
日当35ルピー
- 2 サーター 150,000ルピー, 日当30ルピー
- 3 6600m以上に登山するシェルパ
150,000ルピー, 日当28ルピー
- 4 ベース・キャンプから6600m間で登山するシェルパ 75,000ルピー, 日当28ルピー
- 5 ベース・キャンプに留るシェルパ
50,000ルピー, 日当25ルピー

- 6 ローカル・ポーター 日当25ルピー

ローカルポーターに対しては保険付上の義務はないが、死亡の際は50,000ルピーの補償金を支払うこと。

C・登山隊医師は、登山隊のキャラバン開始前にすべてのリエゾン・オフィサー、シェルパ及びポーターの健康診断を行なうこと。

D・登山隊はネパール登山協会または同協会の許可を得た機関とコンタクトしなければならない。同協会及び機関はシェルパのあっせん、配分等の業務を行なう。

この規則は76年ブレ隊から適用され、既に従来の登山規則により登山料を支払い済の隊でも新規則との差額を新たに支払わねばならないとのことである。

ネパール学術調査報告参会記（東京）

藤江 幾太郎

1月24日、東京女子大で開催された同学会主催のネパール学術調査公開報告会に参会した。その内容は

1 講演（スライド使用）

- | | |
|------------|-----------|
| ネパールの植物的自然 | 福田一郎・東女大 |
| ヒマラヤの栽培植物 | 阪本寧男・京大 |
| ネパールのむらと人間 | 山本英治・東女大 |
| カトマンズの祭と生活 | 古屋野正伍・都立大 |
| | 渡辺雅子・同 |
| ネパールの人口問題 | 宮川実・東女大 |

1 映画（8ミリ）

ヒマラヤの少年 学術調査隊製作

で、調査期間2ヶ月、範囲はカトマンズとランタン谷、スライドは何れも大変美しく、カトマンズの祭と生活、人口問題（最新資料による）の両講演を特に興味深く感じた。

尚、席上ネパールより統計関係にて来日中のジョーシ氏の挨拶があった。

インドへ行かれる方はご一報を！

HAAJではインド、ヒマラヤを集中的に研究するため、インドへ遠征や調査に行かれる方との情報を交換したいと思います。行かれる方またはその方をご存知の方はぜひHAAJの東京か名古屋事務所へご連絡下さい。あまり人の行かない山岳地への旅行でも結構です。

ヒマラヤの意味

水野 勉

「ヒマラヤの閑話」と題して連続して書いていくつもりが、3を書きながらだいぶ日経ってしまった。忙しさにかまけて怠けたのであるが、これも「閑話」ということで、ゆるして頂きたい。

さて、1975年はヌン・クン、ガルワルと二隊を送り出し、それぞれ成果を持って、全員無事に帰ってきたのは喜ばしいことである。これもHAAJの裾の拡がりと会員の熱意の賜物であろう。あと残るのは報告書であるが、これもせいっぱい立派なものにしたいものである。登山の面だけでなく、他の面についても調査あるいは観察したものを発表していただきたいと思っている。その点では、HAAJがたんなる山岳会でないことの有利さがある。ヒマラヤをあらゆる面から広くとらえようとするのに、まことに適当な会であるからだ。

ヒマラヤを登山だけの対象として見ないことと最近、痛切に感じている。フランスのジャック・デュピイという人が書いた「ヒマラヤ」という本を読み、翻訳したことで、なおのこと強く感じている。この本はいわば地理の概説書であるが、ヒマラヤという、じつにとらえにくい、広範囲な地域を一つのものとしてうまく取扱っている。山岳、気候、植物、動物、住民、経済、登山などが項目と出てきていて、一つ一つについてそれ程くわしい内容が書かれているわけではないが、ヒンズークシからアッサムまで長く延びるヒマラヤ地域の特徴をつかまえていて興味深い。いままでにもこういう試みを企てた人はいるだろうけれども、なかなか困難な仕事であるので、できなかったのであろう。それだけに、この本がそれ程完璧な出来でないにしても、価値があると思う。メイスンの「アボード・オブ・スノウ」は、登山の概説書としてはすぐれているが、HAAJのように、もっと大きい目でヒマラヤをとらえようとするものにとっては、いささか物足りない。ヒマラヤという地域は登山のみの対象にするには、あまりにも大きすぎる。ジャック・デュピイの「ヒマラヤ」は

どちらかといえば、学問的アプローチをしている。また、他の多くの報告あるいは研究もやはり学問的アプローチをしている。古くは京大の「ネパール学術遠征報告」も「カラコルム学術遠征報告」も、最近の東大の「東部ヒマラヤの植物」もすべてそうである。しかしながら、そのような学問的アプローチのみがヒマラヤをとらえる方法ではないと思う。学問が重要であることはわかっているが、それ以外に、自分の目、肌で感じたものをそのままとらえていく方法だってある。たとえば、文学的アプローチもある。特にヒマラヤに住む人びとの生活については、単に科学的な観察だけが有効ではないと思う。もっと彼らの生活そのものに入りこんだ思考も重要となるであろう。あるいは写真ばかりでなく絵画も一つの方法であろう。最近、スイスから、ミニヤ・ゴンカに関する報告書が40年ぶりに出版されたが(1930年代の遠征)、その本はおどろくなかれ、殆んどページが絵で埋まっているのである。画文集ではないのであるが、じつに楽しい本である。

ヒマラヤとは何であるか——という問いに対して、ぼくらはどう答えていったらいいのだろうか。そういう問の無意味さあるいは不毛をいう人がいるかもしれないが、ぼくは人生とは何だ——と問いかけると同じような気持で、ヒマラヤとは何だと問いつづけた。

HAAJはその意味でもすぐれたヒマラヤの概説書をまとめる力を持っていると思うし、またその義務もあると思う。会員の諸兄姉のうちで、中心になってこういう仕事をする方はいないだろうか。

HAAJへの

入会希望者をご紹介下さい

現在1100名ほどの会員ですが、当面の目標は、2000名です。お知り合いの方でヒマラヤに興味を持っておられる方をご紹介下さい。

雲の上の村

1974年HAAJラムジュン隊隊長 山倉洋一

「あれっ!! またあそこの村まで登るのかよ。
どこかに近道はないのかね」

「サーブ2時間くらいだから、大したことはないよ」

連れのポーターが、30キロ余の荷を背負ったまま、こともなげに言いはなつ。

“冗談じゃないよ。それにしても、何であんなに高い所に村を作るのかね…”と、こちらは空身のくせに、先刻通過した村からやっと下ったばかりの河原に立って、はるか頭上にある村を恨めしげに見上げ、文句を云う元気すら無くなっていた。

ネパールの山間部に入ると、村のほとんどが、どうしてあんな所にあるのかと頸をかしげるほどの高みにある。

どっしりと腰を据えている山の中腹、海拔1000メートルから2000メートルにかけて村々がある。垂直構造の激しいヒマラヤの山では、中空にひっかかっていると云った方がぴったりとする。

そんな村の農家の庭先きに立つと、足元はるか下の方に、氷河からの流れが山裾をえぐり、深い溪谷をうがちながら、白い奔流となって下ってゆくのが見える。朝霧、夕霧が村々の下を流れてゆく。まさに雲の上の村である。

今回のラムジュン登山で、ベース・キャンプへのキャラバンの途中、休養のために停滞したシクリスの村も、ネパール山間部の典型的な雲の上の村だった。

シクリスは、アンナプルナ2峰の南面氷河からの溪谷の下流、海拔1980メートルの高みにあり、ポカラから徒歩で3日行程の最奥の村である。戸数が約100戸、人口500人前後の、山間部としては珍しく大きい村である。

急な斜面を段状に削り、猫の額ほどの場所に家が立ち並んでいる。村の中は石段で上下に結ばれ、石畳の狭い道が戸口から戸口へと縦横に走り、スペースのない場所では、庭の中を通っている。

村の中を通り抜け、迷わずに一度で反対側へ出るの、まず不可能に近い。

家の造りは日本の農家に似ており萱ぶきもある

が、石板ぶきの屋根が多い。

日本の農家と違うのは、木材が少く、泥と石を多く使っていることと内部の構造である。二階が家人の寝室となっており、その下が牛や羊を入れておく部屋(小舎)で、隣に台所兼居間のやや広い部屋がある。総て土間であるから、裸足の生活には足を洗う手間がはぶけ、非常に合理的である一と思っただが、実際は板を作る製材力がないためであるのかも知れない。窓は一部屋に小さいのがひとつあいているだけだが、ヒマラヤ地方の強烈な日光が入ってくるため、内部は結構明るくなっている。

特別な客(ちゃんと泊り賃を置いていってくれる人)の時は、二階の寝室を空け渡し、下の居間で寝る。居間が小さくて寝きれない場合は、子供達が牛や羊と一緒に寝る中にもぐり込んでいる。

地位の低い部族や、下賤な身分(?)の者などが宿を借りると、部屋の中ではなく、軒下の土間にごろ寝である。もっとも宿泊料は只である。(この村での泊りは、素泊りで2ルピー前後、約60円。食事付きで一と云っても小麦粉を練って焼いたチャパティに紅茶だけ一5ルピー、約150円が相場である。)

もっとも大きな違いは、トイレが無いことである。キャラバン中は至る所トイレとなり、男連中ばかりなので別に気にもしていなかったが、村に泊ったとたん、はたと困ってしまった。

小の方は何とかごまかせるが、大の方になるとそう簡単にはゆかず、暇な村人達が、日本人は何をするのかと、絶えず見張っているから、ここならばと家の陰や石垣下に隠れても、ひょいと顔を出してくる。耐まらかねた隊員の一人が、所定の場所を村人に聞くと、道路を指している。まさか? と幾度か聞き返すが同じである。“そう云えば、この村の出口に、おびたしい人間のものが散らばっていたっけ”と思ひ出された。隊員は、考えることより実行が先に立ったのか、目標目ざして駆けだしていった。

しばらくして戻ってきたが冴えない様子であった。案の条、村人が現われたので、ウンを天にまかせ素知らぬ顔をしていたら、相手も道の反対側にしゃがみこみ、やおら話しかけてきたのには参ったと、無然たる顔つきをした。

山間部の村々は、奥地に入れ入るほど、谷はより深く、山はよりけわしくなってくるので、隣り村との時間的距離がますます大きくなっていく。

シクリスの村の正面に、タンテイ村の集落がよく見える。直線距離で2キロメートルくらいであるが、間に深い溪谷があり、おまけに対岸へ渡る吊橋は、ずっと上流か相当下流へ行かなければいけないので、タンテイの村まで半日ほどかかってしまう。私達の足なら1日行程となる。

そんなわけで、村と村との交流は距離に関係なく、河を渡れるか渡れないかによって決定され、たとえ目の前に見えていても、一生逢わずじまいの者さえる。

村と村が、険しい谷と急な尾根によって切り離され、物資は人の背によって運ばなければならないため、村の生産物の流通は特定のもの以外は行われず大部分が村の中で消費されてしまう。

シクリスの村もこの例にもれず、村の外部へは米と羊が出てゆくだけで、その他の生産物は自家消費である。

もっとも、その他の生産物と云ってもジャガイモ、タマネギ、マメ、トウミギキウリの、村内で賄うにも足りないほどの僅かな量の野菜である。たとえ、これ等の野菜を余分に生産しても、ポカラの市場に出すまで3日もかかるのでは、鮮度も落ち、人の背によって運ぶから傷もつき易い。ロスが多く価格が半減しては、一文の徳にもならない。

地理的要因から、シクリス内部の経済は、いまだに物々交換の経済活動が主体となっている。村の中では金銭をあまり必要としない代り、現金収入の道もないから、各戸の購買力は極めて低く、貨幣経済の活動は皆無と云ってもよい。日本なら、どんな片田舎にあっても、食料品と雑貨を売っている店の一軒や二軒くらいは必ずあるが、ここでは、若干のタバコと紅茶に、ひと握りほどの雑品を置いている、店らしきものが一軒あるだけである。

それでいて、茶店だけはちゃんとあるからおも

しろい。薄い紅茶に粉末ミルクと砂糖を少量入れただけのミルク・ティーしか売っていない。コップ一杯で25パイサ（1/4ルピー、約8円）である。時々通る旅人が入ることもあるのだろうが、たわいのない噂話に花を咲かせる村人達の溜り場となっている。

村の上の方に学校があり、30人ほどの子供が二部制で勉強している。教科の内容は読み書きと簡単な算数である。掛け算は高等数学の部類で、大人でも出来る者はめったにいない。3時間で週4日前後の授業が行なわれる。

村の有識者が委託を受けて先生となっているが、欧州の地図を持ってきて、日本は何処かと一生懸命探しているのには驚いた。そういえば、エコノミック・アニマルとは無関係な村だったと、改めて認識させられた。

村の生活は稲作を中心に成り立っている。ネパールでの稲作の限界高度は、2000メートルといわれている。まさかその故ではないだろうが、河原から段状となってせり上ってきた田は、村の上部で終り、そこから上は石ころだらけの畑にシコクビエが植えられていた。

広大な斜面に描かれた小波模様のような段々田のパターンは、ヒマラヤの白い峰をバックにみごとである。「耕して天に至る」の言葉が、実感を伴って初めて理解できた。

ビスタリークラブ第5回集会

5月29日～30日 日本ライン・犬山で

ビスタリー歩調で優雅に生きようという恒例のビスタリークラブ集會を今年も催すことになりました。昨年は大白川の“ドブコク祭り”に参加しまして楽しい集會となりました。今年は一層誰でも参加出来るようにということで次のとおり行ないます。家族づれでぜひ参加して下さい。

期日 51年5月29日（土）～30日（日）

場所 岐阜県、日本ライン・犬山

内容 東海自然歩道、明治村の散策、山里寿男画伯によるスケッチ手解き。

くわしいことは下記にお問い合わせ下さい。

征服と崩壊、そして平和

大木 滝次郎

古代ラダック

紀元前1182年から紀元後 561年まで約1500年続いたゴーナンディヤ王朝にはアショカ王、カニシカ王そしてアビヌニュー王まで19人の王があったといわれている。メソポタミアのアッシリア王朝より少しおくれてはじまったこのゴーナンディヤ王朝の中ではカニシカ王が一番政治力があり、広く領地を手中にした。カシミール北方へも手を広げレーを支配した。これを継いで約1000年たったラリタデティヤ王の時代にはカシミールからラダック全域を治めるようになった。

このころは日本ではまだ縄文式土器時代がはじまろうとしていた頃である。

ラリタデティヤ王の時代のカシミールの住居のほとんどは仏教徒であった。中国から仏教の高僧、竜樹（ナガルジェナ）もスリナガールの近くのハルワンというところに上宿し修業をしていた。今でもこのハルワンには仏教遺跡としてカシミール政府によって保存されている。

A D 337年から 422年、中国の巡礼僧、法顕はラダックなどを旅し「仏国記」という本を書いているが、それによるとカシミール地方ばかりでなくラダック地方も仏教が栄えていたという。

謎の赤銅板

これらの事実を確かめるのはむづかしいが、前3世紀頃アショカ王のもとでインドのパटनाで開かれた世界仏教徒会議ともいうべき第3 仏典結集やカニシカ王の前2世紀の第4 仏典結集のときの赤銅板にきざんだ会議の記録が唯一の記録であろうといわれている。特にこの第4 仏典結集はスリナガールを中心に開催され、このとき仏教の歴史をまとめたものが約 300枚の赤銅板に刻まれ、お寺の地中深く埋められたという。これを発見し、解読することは専門家の間ではノーベル賞級の仕事といわれ、各国が研究を進めているが、未だは

つきりしたことは分らない。

この赤銅板が見つければ、この頃のカシミールの状態がよりよく分るものと思われる。

フン族の侵入

やがて、528年頃に北アジアに勢力をもっていたフン族がカシミール地方にやって来た。この首長であったミヒラクーラは残忍な性格で、自分が気に入らない人はすぐに殺してしまったといわれている。彼が殺した死体にむらがる秀鷹の大群にもってミヒラクーラがやって来ることを人々は知ったといわれるくらいであった。

ヒンズー教時代

フン族が暴威を思うままにし、カシミールの美しい谷が死臭につつまれ蒸発してしまつたあと、ハルシャ王などヒンズー教を広めた王がカシミールを統治し比較的安定していた。589年から1339年の間である。

仏教も勢んであり、631年から 633年「大唐西域記」で知られる玄奘（660～ 664年）もカシミールに滞在していた。

27～29才のときであった。カシミールで彼は、俱舎論（ぐしゃ）、順正理浴（じゅしょう）、因明（いんみょう）、声明（しょうみょう）など仏教理語、語学、文法学などを研究したという。仏教の寺は教百をこえ、僧は5000人あまりもいたという。

この時代のことはカルハナという時代の歴史家の書いた「ラージャタランギー」というサンスクリット美文体の王朝年代記、一般には「王の河」といわれる歴史詩がよく語っている。「ラージャタランギー」は1148～1150年の間に書かれたものであるが、これに含まれる歴史は神話からはじまって1150年までである。日本文に記されたものは鷲見東観著「カシミールの歴史と文化」アポロン社の巻末に載っている。美しい歴史物語である。

この本は残念ながら絶版になってしまっている。

しかし、このように栄えた仏教であったが、チベットのラパチャン国王（788～901年）が暗殺された以後、ランダルマが王位を継承したが、この王は仏教徒に対してかなりひどい迫害をしたといわれ、だんだんカシミールから仏教ははなれていきヒンズー教が入ってきてしまうのである。

1330年頃にソジラの峠を越えてカシミールへ入ってきたドウルチャと呼ばれるメルコ族の人たち、そしてリンチェンという人にひきいられたチベット族の一団がスリナガールを争いの場としてしまった。この2つの勢力は放火や掠奪など思いのままにカシミールの美しい山や谷を荒してしまった。リンチェンの方が勢力が強く、彼がカシミールを支配するようになった。彼自身はラマ教徒であったが、カシミールを統治するにはカースト制度でしぼることのできるヒンズー教が有利と考え、ヒンズー教を信ずることをカシミールの人にするため。しかし、ヒンズーの最高カースト、バラモンの反対にあいしかたなく回教を採用することになった。

回教時代

このような事情があり1339年から1586年は回教徒が中心となった時代があった。ザイヌル・アービディーン（1420～1470年）がこの回教時代の中でも最も繁栄した時代であった。

しかし、この王の末期の1486年頃から再び動乱の時代となった。

1586年6月のはじめ、インドのアクバル大帝がカシミールに入って来た頃から回教君主は終りとなった。アクバル王、そしてこのあとのジャンギール王も良い王様であり、善政をしいた。

1631年10月25日のジェスイット教の宣教師としてFathats Ageuedo とOivieva はラダックに入り、レーの町を訪れている。レーの街から11月ラホールに出、クルを径てアグラへ出ている。

1678年に頃ソクポと呼ばれる中央アジア族からラダックは侵入をうけ当時のカシミール総督、イブラーヒム・カーンの助けをかりてこれを防いだ。そのときラダックとチベットのルドックとの国境線に岩を積んだいわゆるケルンを作り中国との国境とした。現在中部国境争いの一つとしてこのケルンを論拠にしてインドはこの線までを自国

領として主張しているが、中国はそれを認めていないのである。国境の確定はむつかしいものである。ラダックは現在は仏教徒の土地であるが、この1678年頃から約10年間は、助力を受けたイブラーヒム・カンとの約束によりカシミール年貢を払い、また住民は回教徒となっていた。1687年にはラダックは再び仏教国となったが、カシミールへ払う年貢はずっとあとの1801年のクラブシンの時まで続いていた。

外国人の入境

1712年9月27日ローマを出発したイエズス会のイッポリトデシデリは1717年にカシミールへ着き、5月17日カンテルというゾジラ近くの雪山を越えて5月30日バルチスタンへ入った。そして6月26日にはレーの町に到着し、しばらく滞在した。

デシデリの目的はもう一つの宣教団フランシス派の動静をさぐりその欠点をあばいて失脚させようということであった。

デシデリはこのあとチベットへ入り、タシガンからラサまでも足をのばしている。

アフガン人の侵入

1753年頃にはカシミールへアフガン人が侵入してきた。カシミールの回教徒は90%が正統派といわれるスンニー派であり、残りがシーア派である。ラダックはクラブ・シンによって征服されるまで昔の独立を回復しなかった。

アフガン人が侵入してきてそれとなくとも不安定な国情はさらに混乱した。この頃カシミールに来たドイツ人ジョンベークは「カシミール以上に悲しい光景を呈する人間の状態はどこでも見たことがない」といっている。

このあと1819年頃にはターバンで知られるシーク族が1846年頃まで支配した。

ところが、このカシミールに目をつけた英国とシーク族との間に争いがあった。1845年11月のことである。この戦争は1846年3月まで続いた。シーク族の勇敢な戦の前に英国は戦争を中止せざるを得なかった。

しかし、2年ほどたって英国は再びシーク族と戦争をおこした。1848年～1849年にかけてであり、このときは英国はシーク族を負かした。

1846年3月9日の第1回の戦争中止の条件とし

てシーク族と英国は「ラホール条約」を結び、ピラス河とインダス河の間の山岳地を1000万ルピーで英国へゆづった。そのかわり、クラブ・シンはこの地区全域の主枢をにぎっていた。この条約は「アムリツァール条約」と呼ばれるもので、1846年3月16日にむすばれるという手ぎわのよきだったのである。

この頃のラダックはジャンムに住んでいたドーグラ人の統治下にあった。そして、1854年にアレキサンダー・カニンガムがインドとチベットの国境線を画定するために英国から派遣され、長い間ラダックに住んでいた。このときの見聞や調査をもとに書いたのが「LADAKH」という大冊で、現在でもラダックに関する古典的名著となっている。

1827年にはカシミール地方に激しい地震がおこ

り、そのすぐあとにはコレラが大流行するというダブルパンチを受けた。毎日毎日、沢山の死者が出て町は死臭がただよい、死者にかけておく白い布が足りなくなってしまうといわれる。

第2回目のシークとの戦争に勝った英国はカシミールを基点としてチベット地区に盛んにスパイ活動をおこなった。1822年のモーアクロフト (Moorecroft) もその1人であった。商業調査の名にかくれて、理地、政治、民情、経済などの情報を集め、英国に通報していた。

彼は1824年にジョージ・トレベック (Moebeck) をつれてラダックへも入っている。中国との関係のためだけでなく、アフガニスタン、ソ連なども含め中央アジアの政治的価値は英国としても大切であったのであろう。2人は、サトレジ河からチベット西部を通りアフガニスタンまで調査している。

写真展「ネパールで出会った人たち」

植竹清孝

HAAJ 会員小須田義治氏の写真集「ネパールで出会った人たち」が東京錦糸町駅ビルで開催された。公開された作品は氏がHAAJ 第7回ネパールヒマラヤツアーに行かれた時のもので、題名の通りその時出会ったネパールの人々の写真ばかりが展示されていた。

小須田氏のお話によると、今迄のヒマラヤ写真展は山が主体であったので、私は意識してそこに生活している人々のみに焦点をあててみたとのことであった。その言葉通り六面の壁にギッシリ並べられた膨大な数の写真には山は一つもでてこない。しかもカメラの目は村人は勿論、カトマンズ市内の中でさえも、すべて庶民に向けられており、上流階級の人やはでな民族衣裳の人もない平凡な毎日を過ごしている人々であり、たまたま作者が通り過ぎた時の偶然の出合の瞬間が映像化されたものばかりだ。写真にうとい私は写真芸術からの批評はできないが、これだけ多くの点数が並べられると逆に民族学等、学問的な価値がでてくるのではないかと思われてくる。私自身2回ネパールを訪れているのにそこに生活する人々をぜんぜ

ん見ていないのに気付く。

その証拠に会場を訪れた若い教育者グループからネパールやインドについて突込んだ質問をされ、当時小須田氏と同行した中村茂樹さん共々三人で熱っぽく応待する一幕もあった。

未だスペースの関係で発表できない作品が沢山残っていると聞いて、そんなに沢山写真を撮りながら良くゴラパニ峠迄行けたものだと感心した。今度はナムチェ方面の人々を撮りたいと抱負をもらっていた小須田氏は今年のアラスカ、北極、ニュージーランドと飛回るスケジュールを持つタフガイである。

最後にこの写真展にも「ラダック展」の様なHAAJの協力が欲しかったと思った。

(1月10日記)

＝ HAAJ 51年度 ＝ 総会

4月4日(日) 13時～16時

東京事務所で開催いたします。ご出席下さい。

＝ヒマラヤに関する質問と回答＝

㊦ HAAJ 出版物の値段が高すぎると思いますが、もう少し安価になりませんか。

㊧ 現在の印刷費の値上りから考えるとこれ以上安くできないというのが実情です。印刷した本が全部売り切れになるということはまずありませんし赤字を覚悟して出版する資料、例えば「シュルパリスト」、もありますので、そのための資金造りもしておく必要があります。出版関係は一般会計とは切りはなして特別会計として運用しています。参考までに最近出版した「ヒマラヤを歩き、登るために」の費用や部数、定価のつけ方を下記に示してみます。

発行部数：1000部、印刷所：宇都宮市 P社	
(支出) 卵刷費	1,045,000円
編集費	82,500
送料	33,500
雑費	11,800
予想収入	
	760冊×2400円(定価)×0.8-220円(送料)
	※=販売可能数
	=760冊×1700円
合計 1,172,800円 =1,292,000円	

印刷数 1000	500部でも94万円位なので1000部とした
寄贈数 120	本屋、出版社、図書館、著者、他山岳会など
欠損見込数 100	本を送ったりしたときの傷み本、委託者の集金不能などこれまでの経験で10%は見込の必要がある。
HAAJ 保存用20	

※販売可能数1000-240=760冊

※20%は委託販売手数料(直接売の場合は200円~300円安くしている)送料220円は委託先に送る送料や返本のための送料など。

上記を見ると分るように支出の98%は印刷費で定価2400円の中にしめる印刷費の割合は印刷費の1,172,800円を2400×1000部で割ると48%となります。このP社は会員の紹介で特に安くしていたもので、普通なら120万円位かかります。3年前の2.5~3倍位になっています。そして、送料の一部はP社に負担していただいています。もちろん原稿料は一銭も払っていません。

編集費は、青森、栃木、名古屋に編集者が住んでいたためその連絡、旅費、写真の引伸、速記の

整理などの実費です。ほとんどが無料奉仕でやっていただいたものです。送料は印刷費から委託の本部、HAAJ 事務所への送料、など出張した時に支払ったものの総計です。雑費は原稿用紙、割付表などです。

販売可能数 760冊が全部売れば119,200円 黒字になります。しかし、これまでの経験で2~3年かかって 500部位しか売れず、その場合は322,000円の赤字です。出版以来約半年たった現在100部足らずしか売れていないことを見ても、そんなにすぐに 500部が売れることは予想できません。この間はHAAJ 出版基金や個人から借金という形でやりくりをしています。

もし、全部売れて黒字になったそのお金は出版基金に入れ、次回出版のときの資金にしています。

以上のように、せいぜい500~2000部しか売れぬ本の出版をこれからも続けて行こうと思うなら、上記のような売り方で頒価を決めざるを得ないのです。3000部、5000部と売れる本はなかなか出版できないのが実情です。深田久称の「ヒマラヤの高峰」でさえ平均約4000部しか売れなかったと聞いています。

もちろん少しでも安くヒマラヤ資料を皆さんに読んでいただきたいという気持は充分にもっています。これまでもそうしてきました。

HAAJ の本を安くするためには少なくとも1000部は確実に売れるような価値ある本を出版すること、そして、それは会員の皆さんの協力によって達成できるのです。

以上、最近のHAAJ 出版物の値段が高いというご質問のお答えとして記しました。要するに印刷費の極端な値上りと発行部数、販売部数の少ないことが原因です。よろしくご理解いただければ幸いです。

㊨ インドのヒマチャル・プラディシのラホール、スピティ地区での登山のための偵察及び6000m 峰の登山を試みようと考えております。なお装備、食糧は出来るだけ現地調達したいと

考えております。下記のことについて教えて下さい。

1. インド政府 (IMF) からの登山許可の取得に必要な書類及び申請の手続
2. マナリの登山学校で借用出来る装備品とそのリストがありましたら譲っていただけませんか。
3. HAAJ のインドのマナリにあるデポ装備を借用させてもらえないでしょうか又デポ装備のリストがありましたら送って下さい。
4. ラホール&スピティー地区の地図で1/5万分~1/50万分位の地図がありましたら譲って下さい。
5. バラシグリ氷河の記録及び報告書がありましたら譲って下さい。
6. インドでのリエゾン, シェルパ, ポータの事故時の保障 (保険金) はどうなっているのでしょうか。

- ⑧ 1. IMF への申請書は「EXp .I」に書いてあります。ネパールと同じ内容です。1975.8に決ったインドの登山規則は「ヒマラヤ」47号21Pをごらん下さい。その中の⑤の項のパスポートNoなどが需要ですので、早くパスポートをとらないといけません。
- ビザはなかなかとるのがめんどろななので慣れた旅行エイジエントにたのむ方がよいです。
2. マナリの登山学校ではたいていの登山装備はあります。借用したいリストを作って問合せる方がよいです。貴隊の名で問合せて下さい。HAAJ 会員として個人で借用される場合以外はHAAJ の名前は出さないで下さい。
 3. HAAJ のインドデポはニューデリーにしかありません。借用できます。リストがありますのでご請求下さい。2セットあります。その他登攀具, ザイルなどありますが現在整理中で3月末になればはっきりします。
 4. ラホールスピティ地区のお分けできる地図はありません。「岩と雪」の附録が公刊されているもので唯一です。1/50のAFSならマップハウスへ問合せて下さい。取り寄せてもらえます。HAAJ で聞いたといつて下さい。
- ⑨ 150 渋谷区宇田川町15-1 渋谷パルコ
5F トラベルサロン TEL 03-464-6867

5. 東京電機大の「ティロット谷」に附録している地図があります。

1700円 (送料共) また、英文の「Himalayan Wonder Land」が出版されています。by M.S.Gill. ただし、登山の記録ではありません。

6. インドのリエゾンには日本から保険をかけるか、現地自分でかけさせて料金を払う必要があります。ポータなどには任意でよいです。なお、遠征には細かいテクニックがあり、文書では説明しきれませんし、誤解のもとになります。ぜひ集会においで下さい。

ブランマII (6485m) 登頂 帰国挨拶

このたびの私共の遠征に際し、御指導、御援助を賜わり厚く御礼申し上げます。

この山は、未知の探求と、より高くより困難を求めて歩んできた私共にとってまさに理想的な山でありました。そしてこの山行が、北海道の山々で鍛えた技術と、マッキンリーで得た経験、さらに御援助と日頃の御指導をいただいております皆様方の御厚意の上で、完登出来たものであり、次の飛躍への足がかりになるものと確信しております。

登山行動等の詳細と体験については、後日の報告会及び報告書により発表いたしますので、その節は御批判、御観賞いただきたくお願い申し上げます。

札幌山岳会

〈行動日誌〉

8月5日	本隊8名	札幌発
21日		BC (3,440m)
26日		CI (3,960m)
9月1日		CII (4,320m)
3日		CIII (5,450m)
8日		CIV (5,800m)
12日		CV (5,950m)
15日	能久, 横山	15:30登頂 (6,485m)
18日	全員	BC
23日		BC発
26日		キシユトクール着

ダージリンの印象

○. あの、ベンガルの術々の激しいまでの人々の生の営み、すべてのダイナミックさに比して、この街はまた、何というおだやかさであろうか。

10月下旬まで、連日30℃を越していたインド平原のさしもの熱気からも隔絶されて、やわらかな晩秋の日ざしにつつまれていたダージリン。

色とりどりのホテルや英領時代の別荘、それが木造建築であるというだけで、心にしっくりくるものがあった。

たいした事前準備もせずに歩いた平原の街での日々が、いかにもあわただしく気苦労の多かったことから、余計に、この街のたたずまいに心の安らぎを覚えたのかも知れない。また、永く苦しかった遠征が無事に終り、成果を収めた後の気ままな旅の終点であるという感傷も加わっていたのだろう。

やはり、山好きの者にとっては、一かけらの山も見えない平原よりも、目を上げれば白い山の飛びこんでくる山地の街の方が性に合っていることは確かだった。

○. カルカッタからのフライトが3時間も遅れ、バグドグラ空港に着いた時は日没であった。ダージリン入城の登録を済ませて、相乗りタクシーでダージリンに着いた時は21時近かった。段々の斜面に深い霧に包まれてポーッとかすんだ街の灯が旅情をかきたててくれた。遅く着いたので良いホテルを探すが出来ず、「Karton House」という、タクシースタンドの直ぐ下の、日本で言えば民宿のような安宿に仮宿することにした。仮寝台の二部屋しかない小さな宿であったけれど、幸い泊り客はなく、これ幸いと二人で一部屋ずつ取って、インド滞在の中初の個室生活に恵まれた。昔、家族が使っていた部屋らしく、記念写真が飾ってあったり、家具調度品が置かれていて、生活の匂いがプンプンしていた。

翌朝、宿の主人が朝食を運んできた。勘定を聞くと、2人で36ルピーということでビックリ、加えて、主人の実直そうな人柄からも一夜で逃げ出

すのは気が引けて、もう一晩居ようやということになった。

計画はダージリンに一週間ほど居る予定だったので、フトコロの方も気になっていたわけである。

夜、主人が自慢の仏間を見せたいというので拝観。銀器の仏具、見事な金色の仏像などを配した豪華な仏壇が、六畳間ほどの部屋狭しと飾られているのにはぼう然とした。

片すみにはダライ・ラマが使用されたという椅子が置かれ、その椅子に腰かけて説法しているダライ・ラマの写真が飾られていた。

ダライ・ラマは時々、インド各地のラマ教徒を訪ねてまわるらしい。後で行ったサンダクプーへの途中の、標高3000m近くの寒村のラマ寺にも、そこに来たダライ・ラマの写真があった。

この主人は、チベット動乱の折にダライ・ラマと一緒に逃れて来たという。かつてのチベットの全能の生き仏は、今も昔と少しも変わらずに彼らの信仰の支柱となっていることを実感した。

きらびやかな仏間と生き仏のお座りになった椅子、そまつなこの家とは余りにもかけ離れたアンバランス。しかし、それがアンバランスであればあるほど、彼等の信仰の強さを証するものように思える。

昔日のチベットでの豊かな暮らしが思い出の中に生きつづけているような老チベタンであった。

○. 朝7時、モーニングティーが部屋に来ると起き出して、真先に窓に向ってカンチェンジュンガを見るのが日課になっていた。

もう、この時間になると、ハッピーバレーから霧が上がり始め、シンガリラ尾根の中腹まで雲に隠れてしまう。けれどカンチはまだまだ高く雲を離して、東の空を区切っていた。

まろやかな味の紅茶に、草原の香りのするような山羊乳を注ぐと、薄く脂肪の皮膜が表面に広がる。まだ、幾分ぼんやりした寝覚めの気分でカンチをながめたおだやかな時間が、時の径つほど貴重なものであったように思えて来る。“時は金なり”という言葉は専ら多忙の代名詞のように受け

とられているが、こうしたゆったりした時間こそ
真実我々には“黄金の時間”であるように思われ
る。

ダージリンの市街のはるか下、通称“ハッピー
バレー”の谷や、シッキム国境のカリンボンへ行
く途中には、傾斜地をうまく利用したティーガー
デンがいたる所にある。

良く刈り込まれた茶畑は、周囲の景観にマッチ
して、まるで箱庭のような美しさを見せていた。
ここの紅茶は名が知れており、アッサムやセイロ
ンのもより良質といわれている。シャクナゲ
の巨木に寄生するサルオガセやラン科植物を見る
時、うまい紅茶の秘密が分るようである。

やわらかな日射と適度の日照時間、湿り気を帯
びた大気の中で良い香りが育まれるのだろう。

アッサムのティープランテーションに比べて、
ここでは家族労働的に作られている農園が多いこ
とも好感がもてる。

○ 街には東部ヒマラヤのあらゆる人種の顔が見
られる。ブータン人、レプチャ、ネパーリー、チ
ベット人など。ヒンズーはここでは主役ではない。

ダージリンという街の占める位置が東部ヒマラ
ヤの人種の十字路になっていることを物語ってい
る。

自分と似た顔の中にいると何となく心安らぐか
ら不思議である。特に、日焼けした我々はどこか
から見ても日本人とは思われぬらしくふりかえる
人もいない。相棒の館野君なんかは“カンバ族”

かと聞かれて噴がいていた位であった。そう言
われてジックリ見ると、なるほど彼の顔はマダラ
に日焼けていて、彼の戦闘民族カンバに良く似た
精悍な面がまえになっていたものである。

通りを行く人の歩調も別に急ぐわけでもないし、
何よりも言い寄ってくるリキ車や物売の群がない
のが有難い。

安田徳太郎がレプチャ語を研究して、日本語の
起源をここに求めているが、何となく否定出来な
いような気になってくる。今でも南会津や、飯豊
朝日の山村に行けばお目にかかれるようなつま
しい顔がここにはあった。

ダージリンの植物園には、日本にあるものとそ
っくりな山桜が、今を盛りと花をつけていた。

10月末、異郷の樹木の中に混って咲く山桜は奇
異に見えるのが普通だろうが、大した抵抗もなく
視界の中に入ってくるのが不思議である。“照葉
樹林文化”という言葉が頭に浮んだが、ここには
あらゆるレースの植物が混然となって奇妙に調和
した森林相を作っていた。それを可能にするよう
な複雑な気候がこの地を支配していることが分る。

桜以外にも、日本で見かける樹木に似たものが
幾らでもある。それらは遠く日本にたどりついて
矮性化したものの原型をとどめているように、伸
びやかであり、花は大きい。

我国の植物のうち、多くのものが東部ヒマラヤ
に原産地を求め得るということが素直にうなづけ
たものである。

(福田 定重=HAAJガルワル隊副隊長)

パミールとコーカサスの山・オープン

ソ連では国際登山やキャンプ (I MC) として
パミールとコーカサスの山を一部オープンした。
しかし、自由に登れるものではなく期間、山域が
決められる。

①レーニン峰 7月10日～8月15日 1000\$

②コムニズム峰とコルジェネフスカヤ峰 同期間
1200\$

③コーカサス 7月1日と8月1日から30日間
750\$

上記費用はソ連邦滞在中ほとんどの費用を含
む。申込みは ①山岳団体の名称、登山隊長名

連絡先、参加人数、希望地域 (②はすでにJ A C
隊が申込み済) を明記して下記へ送る。

Administration of the International
Mountaineering Camps,

U.S.S.R. Moscow G-69 Skatertny per. 4

そして、そのコピーをU I A A 参加団体である
J A C へ送ること (事前に了解を得ること)

なお、天山やパミールの山麓の観光旅行地とし
てはアルマアタ、ドシャンベ、フルンゼ、ヒヴア、
フェルガーナとその近隣地がオープンされていて
個人旅行も可能である。

新刊・旧刊

ヤルンカン

京都大学学士山岳会

朝日新聞社 ¥5,500

数年ぶりに高峰登山を実行したAACK（編著者の略称）の公式報告書だからAACKらしさでいっぱいだろうと出版広告を見て以来、心待ちにしていた。その内容はまず望みどおりであったが少しもの足りなさもあった。

AACKの登山態度が常に学術探検と初登頂主義にあり、対象の山とルートは「ヒマラヤ鉄の時代」や「スポーツ登山」にはいきりこまない、優秀な後続スタッフの養成を心がけている——これらを、第二部座談会「ヤルンカン登頂の意義と背景」で今西、西堀らが述べている。

しかしながら、今あらためて彼らが以上について話しているのは、ネパールヒマラヤ登山禁止と再開後にAACKをとりまく探検と登山の世界がAACK自身をやり動かしていることの反応だし、いち早くそれに気づき互いに再確認しあっている指導者群、と見えなくもない。すでに京大山岳部とは別に探検部が発生している。

本書の第一部は「ヤルンカン初登頂」で山の決定から登頂、死亡事故、帰途まで、この第四章で登頂後の松田隊員事故を報告しているが事故原因についての検討は、第三部各種報告にも無い。けれども検討と反省のための場は設けられているので（第二部座談会 梅棹忠夫『別の場で徹底的に行われておりますので』）、結果を本書に載せなかったのはおしんでもあまりあろう。第三部の報告よりそれを読みたかった。

手元に「エベレスト」日本女子登山隊報告書がある。この隊にとって（他の8000m隊にとっても）頂へのHOW TO 習得こそ重要であり、終了後の報告書発刊目的と編集も従来のスタイルを踏しゅうしているからいきおい内容は、エベレストノーマルートへの良心的なガイドブック風になってしまった。だが、もしも隊員に遭難死亡事故がおきていたらおそらく、隊の構成、指揮系統期間、荷上げ量、登山技術上の問題など詳細に検討反省して報告書にのせているだろう（そうでな

い場合も多い）。しかし本来は登頂に成功した時こそなぜ成功できたのか計画を比較してどんな登り方をしたのかなどを考察すべきなのだ。エベレスト女子隊報告書をそのように読めば彼女達が編集の参考にした各隊報告書こそ欠点をもちつけてきたといえよう。

ヤルンカン登頂展（東京では高島屋）と会場のパンフレット、登頂展に続いて開かれた講演（有楽町朝日講堂、西堀と樋口）などでも事故究明は成されていないように思う。

ただ、西堀は「どのように登頂者を選んだのか」との問いに「今回の計画に一番情熱のあった者を選び、その者に同行者を選ばせた」と答えている。（1973. 7. 23有楽町日本交通協会ホール知研主催講演「探検と情熱」後の自由質問で）

事故研究へのもの足りなさを指適する時、AACKの基礎京大山岳部から昨年11月発行された「1973. 11槍ヶ岳遭難報告書」をあげなければいけない。以下の理由からだ。第1には、事故究明がここでは整理表現されている。第2には、カラコルムK12・AACK隊（1974. 8）でも登頂後死亡事故が発生したがどんな報告書を発行するか。

第3には、先にあげた女子隊の雪崩事故文章中に「ナイフを持っていて助かった」とあり、京大山岳部で雪崩から生かした部員数人はナイフを胸のポケットに入れる部の習慣？のため助かると報告している。両隊とも就寝中のことだ。

事故原因の検討と対策という雪崩の起きそうな所へ幕営せぬことを結論づけてしまいがちだが本質的にはナイフの有無が生死を分けているのかもしれない。しかし京大の場合、死亡した部員がナイフを所持していたかどうかは明記していないこの報告書は東京お茶ノ水茗溪堂においてあるらしい。直接には〒606 京都市左京区

西堀隊長はヤルンカンでアマチュア無線を利用したがネ政府の意向に反したせいか本報告書に詳しくない。この方面の同好者にはこの点ももの足らぬが、アマチュア無線雑誌にレポートを書かれているのだろうか。隊員が他の文献に寄稿した文も一覧にしてくれると有用だ。（ひ）

新刊・旧刊案内

Himalayan Mountaineering Journal
1973 VOL VIII

DarjeelingにあるHMI (Himalayan Mountaineering Institute)で編集発行している。この雑誌は1965年に創刊され、現在1500部以上の発行部数になっている。

HMIでは、この雑誌の終身購読者(終身会員)を募っており、日本でも大いに登録してほしいということなので、HAAJ会員の皆さんにお進めしたい。終身会費はUS \$ 35.0である。下記へ申込みが良い。

The Editor

Himalayan Mountaineering Journal
C/O Himalayan Mountaineering Institute
Darjeeling West Bengal (INDIA)

VOL VIIIには、ブランマ(ポニントン)、ガングストン、サセル・カンリ、その他インド・ヒマラヤの記録、インド隊の登頂史年表、P.6992でのインド・ニュージーランド合同隊のアクシデントの状況、国内の登山団体の活動、HMIの活動、国際登山者集会のもよう、その他が載っている。インド・ヒマラヤに興味を持つものには見逃せない。

なお、バックナンバーの入手は不可能である。

73年度については若干部数まとめて注文してきたので、下記へ連絡されたい。(I)

Bibliographie du Nepal

VOL III-I Cartes du Nepal

フランス国立中央科学研究所から、73年に発行されているので、入手された方もあろう。VOL I「人文科学」でも、ネパール関係の文献と共に若干の地図リストを付していたが、この巻は「ネパールの地図」という長題で、地図Onlyである。

17世紀以来、現在までに発行または作成された主要な地図の殆んどを収録してある。

18世紀以降分は372葉について、発行所、発行年、範囲(緯経)、縮尺、サイズ、その他が紹介されている。また、主要な地図には多くの頁を割いて詳しく作成過程などを記している。

古典的地図が写真版で収められており、現在図と比較してみると大変興味深い。

但し、残念なことにフランス語である。

発行所は

Editions du Centre National de la
Recherche Scientifique
15 Quai Anatole - France - 75700 PARIS
約4,500円 + Postergeである。(I)

シルク・ロード事典

前島信次、加藤九祚共編 50年9月30日
芙蓉書房 A5変型 600P 4,800円

シルク・ロードブームはとうとう事典を出すところまで来た。

第1部は「中央アジアの地誌」で、地名127項目、第2部は「西域探険の人物誌」で、人名51項目を載せている。

解説はかなりていねいである。「サマルカンド」については11ページ、「玄奘」では7ページを費している。地名はカタカナ、欧文つづり、漢字の三表記をとっている。(I)

誰も書かなかったインド

高尾栄司著 サンケイ新聞社出版局 50年10月
4日発行 700円

著者の滞印4年半を通して見たインドの素顔。哲学専攻者だけに、従来の旅行者的眼で見た紀行より深い考察がされている。インドの素晴らしさと同時に陳腐な面もえぐっている。

ヒマラヤの本・資料

ヒマラヤ関係のものが出版されましたら紹介しますので、名古屋事務所へ1冊お送り下さい。

書名・発行年など	発行所など	頒価	送料
HHA インドヒマラヤ遠征帰国報告 1975年	H A A J	600円	140円
カシミールとラダック 1974年	"	900	100
第3回東北ヒマラヤ研究会報告書 ヒマラヤ研究Ⅷ	H A A J	1,400	200
EXPEDITION I ヒマラヤ研究Ⅹ	"	2,000	300
秘境小チベット・ラダック (地図つき)	"	2,400	300
第2回東北ヒマラヤ研究会報告書 ヒマラヤ研究Ⅳ	"	1,100	300
HAAJガンジロバ隊帰国報告書	"	300	0
海外登山研究会資料Ⅳ マカルー交信記録, 他	J A C	1,000	200
東海山岳Ⅱ	"	800	100
東海山岳Ⅲ	"	2,500	300
チベットとラダック	H A A J	1,000	200
カシミールの街と山 ネパールへの旅	"	各 600	100
ヒマラヤの桃源境, ブータン・シッキム・アッサム	"	2,200	300
ヒマラヤを歩き登るために, 第4,5回東ヒマラヤ研報告	"	2,400	300

「ヒマラヤ通信」「ヒマラヤ」バックナンバーは下記のものしか残部がありません。

第1号(20円), 第2号(20円), 第9号(50円), 第17号(150円), 台本製本用紙(200円), 第20~第52号(ただし, 27, 35, 36, 38, 39, 42は品切)。各送料共400円に割引。会員のみにししかお分けできません。

東京・名古屋事務所へ取りに来ていただけると送料分だけ安くなります。各地で開くヒマラヤ集会にもできるだけ持参します。注文は先着順に受付。通信での申込は代金を添えて下さい。

〒468 名古屋市天白区一つ山1-44-7 HAAJ名古屋事務所 郵便振替 名古屋 21645 番

銀行振込 東海銀行鳴子支店 133-239 番「日本ヒマラヤ山岳協会」(注: 図書券は4月1日より中止)

郵便振替振込用紙はこの郵便局にもあります。送金料も安くて便利です。ご利用下さい。

<HAAJ東京事務所へのルート> 国電中央線中野駅南口下車。三菱銀行の左側, 南口商店街を抜け, 中野総合病院と中野郵便局の間の斜めの広い通りを左へ入ります。途中「公会堂下」のバス停を通過し(ここまで中野駅, 永福町, 渋谷, 新宿よりバスの便がある)400m位進むと左角に自動車屋があり, そこを右へまわって200m行った右側に「沢本ビル」があります。中野駅からゆっくり歩いて15分ほどです。HAAJ事務所はその1階です。金曜, 土曜日の13時~20時まで担当の鈴木康志がいます。

<HAAJ名古屋事務所へのルート> 地下鉄「新瑞橋(あらたまばし)」下車。島田方面の循環線90番のバスで「一つ山住宅口」下車。たばこ屋を左にまわり, 小川病院を通りぬけ, つきあたりの道を右にまわった3軒目, 「沖」方です。

HAAJ出版物は下記の書店で扱ってもらっています。山の本を多くそろえ, 親切にサービスしていただける書店です。HAAJの本だけでなく, 本のことなら何でも相談し, 利用して下さい。

H
A
A
J
出
版
物
特
約
取
扱
書
店

京都……京都市下京区四条河原町東81
兵庫……宝塚市中州1丁目15-2 逆瀬川ビル内
東京……千代田区神田駿河台2-1
東京……江戸川区西小岩5-18-10
仙台……仙台市一番町2-3-32
名古屋……千種区千種駅前
札幌……中央区南3条西3丁目4番街
広島……広島市本通1-7(金座街)
岐阜……岐阜市神田町通り4
福岡……福岡市中央区天神2丁目9-110
横浜……鶴見区鶴見町3601(豊岡通り)

海南堂(四条河原町電停角)
大野屋書店
茗溪堂(お茶の水駅前)
小林静生書店(古書もあり)
丸善仙台
ちくき正文館
成美堂(札幌駅前通り)
アカデミィ書店
自由書房
福岡金文堂(新天町)
西田書店(古書もあり)

ヒマラヤの旅はヒマラヤのヨロズ屋へ

トレッキングからエクスペディション
まで全て引き受けます。

装備貸出・シェルパ斡旋・現地食料調達
国内外輸送手配・別送貨物通関・ヒマラヤ情報……

EXPRESS TREKKING (P) LTD.

EXPRESS HOUSE

NAXAL BHAGABATI BAHAL

P. O. BOX339 KATHMANDU NEPAL

電略 GREATREK・KATHMANDU TEL. 13017

カトマンズの宿泊は EXPRESS HOUSE

をご利用ください。

家庭的なムードで宿泊代も安く気軽に泊れる宿です。
特に日本のお客様には大浴場が好評です。自炊もでき
ます。 宿泊代—1泊朝食付30RSから

※長期滞在者はご相談に応じます。

日本語でお問い合わせください

インド大陸、中近東方面へ当社独自のプランをいたしております

ツアー名

- ★シルクロード 6,000キロ
- ★ネパールとアフガニスタン
- ★砂漠の国アフガニスタンと最
後の桃源境フンザ
- ★大ペルシャとアフガニスタン

——お問い合わせは下記まで——

(株) トラベル日本

〒100 東京都千代田区有楽町 2-2-1

ラクチョウビル 5F 電話 (03) 572-1461

担 当——^{とよ}外池・永瀬・月候・小島

海外登山, トレッキングに傷害保険を

海外旅行傷害保険(運動危険担保特約付)について研究しております

タケ

岳 産 業 にご相談して下さい。!

あなたの所得を補償する保険をご存じですか? (所得補償保険)

●所得補償1~5年, 傷害特約60~120倍までいろいろあります

自動車・火災・レジャー(山岳保険・国内旅行・つり・ゴルフ・ヨット)・普通傷害・利益
・生産物等の私達の生活に関連した保険を取扱っています。岳産業の西田までご連絡下さい

大正海上火災
保険(株)代理店

タケ
岳

産 業

大阪市淀川区西中島町5丁目第3チサン10F 6号 〒532
TEL 06 (304) 1115番

●ルスノトキ=大正海上十三営業所 304-5774

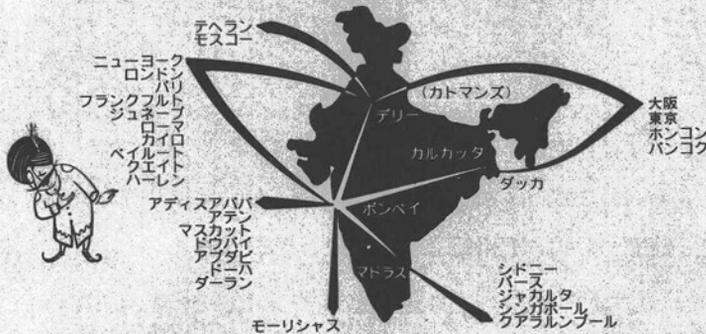
発行 日本ヒマラヤ山岳協会 昭和五十一年四月一日発行 通巻第五十三号 定価 五〇〇円・送料 一四〇円(年間購読料四〇〇円)
 発行者 柴田 金之助 名古屋事務所 四六八 名古屋市天白区一ツ山一四十四一七 五〇五二一八〇一四四一四
 編集 「ヒマラヤ」編集委員会 東京事務所 二六四 東京都中野区中央三丁目四十五一十八 沢本ビル1F 五〇三三三六五二二六二

大自然の神秘と雄々しさ、 ガッツなトレッキング——ヒマラヤ

東はブータン・シッキムから、西はガルワール・ラダック、そしてカシミールへと三千キロ。実に、ヨーロッパ・アルプスの二倍です。雄大な八千メートル級の巨峰の連なるヒマラヤを自分の足で踏みしめ、自分の肌で感じるワイルドなトレッキングは、どのレジャーも及ばないスケールの大きさと心の安らぎを与えます。

ノ1・公害
 時間に追われ、人間関係のわずらわしさに悩み、たまには仕事から逃げ出したいと思っている都会のビジネスマン達。彼らにこのヒマラヤ山麓の魅力を教えてあげてください。8000m級の巨峰が連なる大自然の景観。斜面一帯を華やかに色どる花園の美しさ。海拔4865m、常に雪塊や氷塊をたたえているアルハルウツト湖の神秘的な静けさ。すべてが彼らの求めている超現実的な世界です。

シッキム
 ごく最近まで鎖国状態であったシッキムへ入境することができるようになりました。観光客のほとんどない現代の「桃源境」とはこのこと。王宮を中心に神秘の国が、静かなたずまいを見せています。
 ダージリンからの途中にあるカリボン町の町も、長期滞在に向いた静かなリゾート。買物も楽しい思い出になるでしょう。
 「牯」シッキム入境の場合はインドのビザとは別に特別許可が必要ですが、詳しくはエア・インディアにお問い合わせください。
 ガルワール・トレッキング
 ガルワール地区は、デリーの北東約400キロの地点にあり、1974年7月か外国人に解禁されました。ナンダデビル(7816m)や、ガンジス川の源流近くにあるヒンズー教の聖地をたずねるトレッキングや、高山植物の宝庫「花の谷」や4000mをこす山岳湖への旅が楽しめます。



世界の35都市をネットする

エア・インディア

東京●千代田区有楽町日比谷パークビル〒100 ☎214-7631
 大阪●東区備後町松豊ビル〒541 ☎264-1781
 名古屋●中村区堀内町ホテルニューナゴヤ〒450 ☎581-5876
 広島●鉄砲町1-20第3ウエノヤビル〒730 ☎28-7211